



中舞鶴の歴史・くらし探検隊 活動ニュース

第5号

発行 平成27年10月15日

編集 中央公民館

舞鶴市字余部下1167

第4回探検 余部下を歩く

鎮守府の面影 いたる所に 開庁時、寺社も集落も大移転

「中舞鶴の歴史・くらし探検隊」(27年度中央公民館事業)の第4回「探検」を9月13日に余部下地区で実施しました。中舞鶴駅跡をはじめ、海軍鎮守府(明治34年開庁)の主要な施設があった国家公務員宿舎周辺、余部下稲荷などを訪ねました。概要を報告します。



水交支社の門

水交社は海軍士官や士官候補生、高等文官等のための親睦／共済のクラブで、東京に本社を置き、各軍港等に支社が設置されていた。戦後の昭和27年～32年までは警備隊舞鶴地方総監部が置かれていた。現在は、防衛省職員の宿舎が立ち並んでいる(舞鶴市「ふるさと今昔写真集」(平成6年2月発行より))



▲昭和30年代の水交支社

今も現役の宿舎と 東郷邸



鎮守府開庁にあわせ建てられた今も現役の宿舎(写真上)。東郷邸(同左)とよく似た造り。どちらの鬼瓦にも海軍のマーク入り(同左下)。東郷邸は今春から毎月第1日曜日に一般公開されている。



西門はどこにあった？



鎮守府の西門があった場所(写真左)。コンビニの前あたりで、当時は門番が立っていたという。なお、当時の門は、前島地区の警備隊に移設させている(同左下側＝舞鶴市「舞鶴の近代化遺産」より)



中舞鶴駅とSL広場



▲昭和30年代の中舞鶴駅(写真の右側)
舞鶴市「ふるさと今昔写真集」より

中舞鶴駅跡に設けられたSL広場(写真左)。案内板に当時の中舞鶴駅の写真と概要図が記載されている(同左下)。駅のホームは3番まで。中舞鶴線を走っていたSLはC12などと言われている。広場周辺は格好の子供たちの遊び場。蒸気機関車には見学用の階段・テラスがあり、機関室で石炭をくべて遊んだ思い出があるという。



石炭をくべる罐(かま=写真左)。石炭代わりに石を入れて遊ぶ子どももいる

余部下 大門通り



▲鎮守府の正門(西門)や駅前に続く下本通り。昔の地図では大門通りと記されている。

布川家 ～大きな三角形の壁～



明治期の水交社の建設に伴い現在地に移転したとされる。本通りに面した大きな三角形の壁面を有する部分は、現在地に移転した際に後方の旧宅に接続して建て継がれたのであろう(以上、「舞鶴の民家」(舞鶴市ホームページ)より)



▲薬医門(やくいもん)と呼ばれる門



▲本通り側には格子等、町屋の風情

雲門寺跡 鎮守府設置で移転



鎮守府が設置されるまでの雲門寺があった場所には、記念の石柱が建てられている(平成4年、舞鶴市文化教育財団が設置)

余部稲荷



石段(写真右)がきついで本告寺の境内から続く参道を登る。社殿には第2代鎮守府司令長官が揮毫した額。内部にも、海軍とのかかわりのある額等が見える。参道や鳥居は、地元有志で整備されたようだ

飯野寅吉像

福岡県出身の飯野は、明治32年、舞鶴で飯野商会を設立し、海軍への石炭納入で成功。その後、飯野商事や飯野海運などを設立。戦後は舞鶴海軍工廠の払い下げを受け、民間の造船所として再出発させた。この像は昭和27年に氏の功績を讃え設置された。



龍神さん



本告寺境内に龍神さんあり。住職から由来を聞く。鎮守府設置に伴う雲門寺の移転の際、引き受け手がなく、現在の地の近くに移転。その後、崖崩れなどで、現在の本告寺境内に祀ることとなったようだ。

中南家

～元は商社事務所～

明治41年(1908年)、東京に本社を置く高田商会の事務所兼住宅として建築(「舞鶴の民家」(舞鶴市)より)。



せり出した玄関部分のポーチ(写真左)。東側の内部にはホールが設けられていたとのこと。洋風の外観を持つ。

共済病院跡



病院の門や塀が残る。一部はテニスコートにも。宿舎もある。



れんがを取り入れた民家



平木家の洋風づくりの建物。煉瓦が使われている



心和むショーウインドウ



ショーウインドウにパッチワークを展示している民家。心が和む。

第4回探検の感想

▽これまで行きたいと思っていた中南家を訪ねることができた。

▽今回は自動車を使わず、徒歩でのまち探検。東郷邸の公開日ではなかったが、同様の造りの総監邸をみてその広さを実感することができた。

▽中舞鶴線が、東舞鶴駅からの支線ではなかったなら、中舞鶴はもっと発展していただろうと想像している。

▽中南邸、これまで関心のあった建物の概要が理解できた。

▽中南家はとても立派な建物。個人の住宅だが、まちづくりに活用できるのではないかと、もったいないと思う。中南家の保存も必要。

▽中舞鶴全体に海軍の遺構がたくさん残っていることに感心した。共済病院の跡・・・

▽稲荷神社を久しぶりに訪れて、子供のころ遊んだ記憶がよみがえった。祭り当日には旭通りにもたくさんの夜店が出てとても賑やかだった。昭和40年代、祖父が稲荷神社の鳥居や階段の整備をしていたことが思い出される。

▽龍神さんが移転してきたことを知らなかった。

▽これだけ狭い地域を巡っただけでも、東郷元帥や飯野寅吉等、すばらしい歴史が詰まっているのは本当にすごい事。

▽菖蒲谷にあった雲門寺。鎮守府が来る前の眼前に広がる海、浜、イサザが遡上する川を想像する。また2000年前の姿も想像してみる。

▽歩いて細かいところを見ることができてよかった。どこを見ても鎮守府の影響がある。

【お断りとお願い】掲載内容については、今後の探検活動の中で、追記・修正等を行う予定。後日、活動成果を取りまとめた展示を中央公民館で開催する計画です。掲載内容に関連する情報提供をお願いします。

舞鶴の地名を考える

～餘部の古代 その④～

東表国(とうびょうこく)は天の王朝とも呼ばれ朝鮮半島南部、九州、中国地方一帯を約千年にわたり支配していた。歴代の王は代々海部知男命と名乗り、大陸名は明臨答夫、オリエント名はクリタシロスと呼ばれていた。由良と宮津の間にある栗田(くんだ)は元々は「くりた」が正しく、久理陀神社もある。なお、明石(あけし)にある須代神社はシロスから借用したものと考えられる。この王はエビス人系であった。この天の王朝にも時代の荒波が打ち寄せ、消滅するのであるが、やはりその引き金になったのは秦の始皇帝の中国統一であった。一時は高句麗王の次代

王を殺すほどの力を誇っていたが、新大王の治世下、イワヒコ(和名神武天皇)の侵攻を受け、後退せざるをえなくなり、王の座を高倉下命(たかくらげのみこと)に譲り、一族郎党を引き連れ丹後に移動したと考えられる。これが「あまるべ海部の部」の実態であり、海人族ゆえに本隊以外にもこの時日本各地に分散したものと考えられる。舞鶴湾に入ってきた一隊は、やや遅れて入ってきた高倉下命の支配下の者たちであったのだろう。ゆえに餘部の氏神様は高倉神社なのである。海部家を主家と仰ぎ、彼ら海の民はこの地(但馬、丹後、若狭)に第二の天の王朝を造ろうとしたのではないだろうか。丹後を調べていくと、その感が日に日に強まるばかりである。

(井本精一)